

ロシア貴族とウサージバ：

A・オレーニンと別邸プリューチノ（3）

坂内知子

1. ロシア帝国と貴族

ロシア帝国においては貴族（ドヴォリャンストヴォ）とはどういう存在であったのだろうか。19世紀中ごろには100万近くの人々が貴族と称されていたが、約半世紀前の18世紀末では貴族層はその半分ほど、50万人ぐらいであった⁽¹⁾。この急速な増加の要因は無論、ピョートル一世の創設した官等表（1722年）によって国家勤務の功績をもとに新しい貴族が輩出したことである。官等表は多少の変更は加えられたものの、国家運営の骨子として帝政期の最後まで存続し、官等表による世襲貴族と一代貴族は増え続けることになる。

また、ロシアの帝国としての強大化により、支配地域の拡大や戦争による併合領域があり、その地域（ウクライナ、バルト、ポーランド、グルジア、ベッサラビア、シベリア等）の支配階級がロシア貴族として受け入れられ、さらに貴族はその総数を増した。

この拡大過程において、17世紀以前からの由緒を誇る名門貴族と新興貴族の軋轢や偏見は日常的に存在していたにしろ、国家を揺るがすほどの抗争にもいたらず、全体としては古い門地貴族は零落しつつドヴォリャンストヴォに呑みこまれ、貴種として貴族階級全体にアクセントを添えるも

（1）Яковкина（2002：8）；Миронов（1999：82-98）；Евреинов（1898：18）。

のとなっていた。

ロシアにおいて貴族は何をもって特権階級となっていたのであろうか。貴族（ドヴォリャンストヴォ）とはもともとモスクワ公国に仕え、軍務に対する報賞として土地をそこに住む農民共々あたえられた人々であり、その家から任務を継続する者が出るという条件のもとに領地を所有、継承していた。大貴族（ボヤール）の世襲領地と違って、それは完全な世襲地ではなかった。しかし、官等表による軍人や文民官僚が国家機関を動かし、専制国家を支える主体的存在となるにつれて、貴族には次々と特権が与えられていった。まず、ピョートル三世が1762年に「貴族の自由に関するマニフェスト」を出し、貴族の国家勤務を義務から外し、自分の意志で退職して領地に帰ることを許した。次いでエカテリーナ二世は1785年に「特権許可状」を發布し、勤務と租税の免除、軍務の短縮、官位昇進の優遇等、また、貴族に対する肉体的懲罰の禁止なども保障した。しかしこの法令の最も重要なところは、貴族の領地を国家の干渉を受けない完全な私有地とし、そこでの農奴に対する警察権、裁判権を認めたことである。地主貴族は農奴をシベリアに流刑移住させるだけでなく、徒刑囚として送り出すこともできるようになった。農奴が完璧に奴隷化することにより、貴族は領地においては全き専制君主となりえることとなった。また、この「許可状」ではこのオールマイティの貴族の身分は貴族会議の判決によってのみ剥奪できるとしるされた。

18世紀の終わりに完成した貴族という身分の、土地と無償労働力（農奴）の私有化という特権は、ロシア貴族の体質を決定し、国家の将来を決める遠因となったのである。

1980年代後半、ペレストロイカの時代に全国民的な尊敬を集め、国の文化政策に大きな影響をあたえていた、ロシア中世文学研究の権威ドミトリイ・リハチョフはロシア国民に向けての啓発的メッセージとして書いた「ロシア的なものについての覚書」（1984年）において次のように述べ

ている。

「ロシア人にとって、自然は常に自由〔スヴォボーダ〕で気まま〔ヴォーリャ〕な広々とした場〔プリヴォーリエ〕でした。「気ままに〔ナ・ヴォーレ〕散歩する」とか「自由の身に〔ナ・ヴォーリュ〕なる」といった言葉に耳をかたむけてください。「ヴォーリャ」とは明日のことを思いわずらうことのないことであり、気ままなことであり、今日という日を心おきなく謳歌することです。

広大な空間はロシア人の心を常にとらえて離しませんでした。それはよその国にはない概念や観念となって現れます。例えば、「ヴォーリャ」と「スヴォボーダ」とはどこがどう違うのかといえは、それは「ヴォーリャ・ヴォーリナヤ」〔気ままな自由〕とは、いかなる境界も持たない広大な空間と結びついた「スヴォボーダ」〔自由〕のことだということにあります。……

……古来、ロシアの文化は自由（ヴォーリャ）や広大さ（プラストール）を、人間にとってのこのうえなく大きな倫理的で美的な富とみなしてきたのです」⁽²⁾（各種括弧訳書ママ）

ロシア人は誰でも心の底からヴォーリャ（気ままな自由）に憧れる、たとえ馬と同じように曳綱を体にまわして船を曳く人夫でも、盗賊の歌を歌ってつらい生活の憂さを晴らす農民でもはてしない自然のなかでヴォーリャに触れることができた、トリハチョフはロシア国民に語りかけている。

このヴォーリャを現実生活のなかで手に入れたクラスがあった。自然の風のように、何ものにも邪魔されず、気ままにしたいようにする——ロシア貴族はこの絶対的な自由、気ままし放題の自由を自分の領地・ウサージ

(2) Лихачев (1984: 10, 12). 長縄光男訳『文化のエコロジー』1988, p. 24, 31
による。リハチョフによるヴォーリャ論は、Лихачев (1985)（桑野隆訳『ロシアからの手紙』1989）でも見られる。

バで実際に追及、満喫することができたのである。ヴォーリヤの完遂がもたらす結末を考えてはいけない、それではヴォーリヤにならないからである。しかし、現実にはそのヴォーリヤの対価は確実に蓄積し、個人生活もロシアの社会をも破滅させてゆくのだが、

19世紀に入っても封建農奴制のロシアでは、農業経済の生産性は低く、領地でもたらされた農業生産物の市場での価格は低かった。市場経済はもうすでに農業では動いていなかったのである。地主貴族の生計は農奴の賦役労働と自領からの農産物に支えられていたが、現金収入は乏しかった。領地からの収入が減ると、一番手っ取り早い増収法は農奴からさらに厳しく搾り取ることであった。よく搾り取るほど、有能な地主とみなされたが、全体的なシステムに何の改善もないままで、生産者である農民は疲弊し、地主も次第に貧しくなり、国家の基盤は弱体化していった。また、こうした非生産的な収益法は地主貴族の倫理観を麻痺させ、安易な消費行動につながった。このロシア貴族の非常識な消費傾向は領地経営を抜き差しならないところまで追い込む宿痼になるのである。

使い放題の無償の人的労働力と乏しい現金収入——これが貴族の経済的実態であった。18世紀の終わりごろには生活費のかさむモスクワやペテルブルグに住む貴族は、そのほとんど全員が借金で暮らしていたといわれる。エカテリーナ二世の寵臣で途方もない財産を有していたポチョムキン公爵でさえ、死後には莫大な借金が残された。無論、貴族たちの生活では経済観念など全く問題にならなかった。貴族たるもの豪勢な生活は不可欠であるという社会通念と、過剰なまでの豪華さや贅美を指向するロシア貴族の情念があった。

欲望の増長・暴走をもたらしかねないヴォーリヤという理念は、現実的には退廃にも繋がっていった。しかし、ヴォーリヤは果てしなきものへの憧れを尊び、創造力を喚起し、その情熱を育てゆく力でもありえる⁽³⁾。ウサージバの文化の中にその果実を見出すことは可能だろうか。

2. アレクセイ・オレーニンの生きた時代：両首都の貴族たち

19世紀の初頭ロシアでは約1500家族の富裕貴族層（全貴族の1.1パーセントにあたり、各農奴所有数1000人以上）がロシア全土の農奴の約三分の一を所有していた⁽⁴⁾。この層の貴族たちは途方もなく裕福で、ロシアの最上層を形成し、貴族層のなかでも特権階級として際立っていた。政治的にも、社会的・文化的にも国の命運を決める立場にあった。外国に出てはその豪遊ぶりでロシア貴族のイメージをつくり、あくなき浪費でロシア帝国を沈下させていった人々である。

アレクセイ・オレーニン（1763-1843）は農奴の所有数からするとこの特権クラスに入る貴族であり、首都ペテルブルグの中央国家機関に勤務する高級官僚であった⁽⁵⁾。前篇で見てきたように⁽⁶⁾、オレーニン家はさほど由緒もない中流の貴族であるが、アレクセイは母がヴォルコンスキイ公爵家の出で、名流との繋がりがあり、そのことは世に出るに際しては大いに力となった。しかし、独身時代は貧しく、結婚して、妻の婚資でやっと家を構えることができた。妻の実家ポルトラツキイ家はウクライナ系の新興貴族だが、両親共に理財家で、経済的にはきわめて豊かであった。その後子供たちが生まれ、夏の別邸としてのプリューチノを建設するに際してもオレーニン自身の経済意識はつましく、堅実なものであった。だが彼の一家はペテルブルグで暮らし、最上級クラスの貴族たちと交際し、そのクラス的生活習俗の流れの中で泳いでいかねばならなかった。彼の経済観がどうあれ、それは避けがたい、貴族として当然の生き方であった。

(3) воля という語の言語文化史的意味論に関しては、Вежбицкая（2001）、さらに Шмелев（2002）を参照。

(4) Миронов（1999:82-98）；Познанский（1975:16）；Файбисович（2006:419）。

(5) Файбисович（2006:419）；Семевский（2013）。

(6) 坂内知子（2012;2013）。

ロシアの上流貴族層の生活でも、両首都と呼ばれてきたモスクワとサンクト・ペテルブルグのどちらに住んでいるかでその様相はかなり異なっていた。これら新旧の首都は帝政期ロシアにおいてきわまって対照的な性格を持つ都市となっていた。ピョートル一世によって1712年から実質首都となったペテルブルグはロシアの西端に位置しながら政治行政

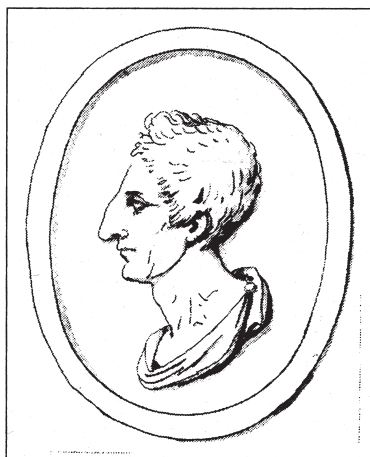


図1 デルジャーヴィンの詩「オレーニンへ」に付けられたオレーニンのポートレート (H. イヴァノフ作)

の中心となり、政府機関・官僚機構の集中する都市であった。またヨーロッパとの国境に近い、バルト海に面した軍都でもあり、町には陸・海の軍人があふれて、偏って男性人口の多い都市でもあった。人工的に造られた都市であり、歴史・伝統が皆無で、まちの隅々に官僚的で規範的な堅苦しい空気があり、皇帝の住むまちとしての、礼節と緊張感が要求されてもいた。

一方、古い歴史を誇るモスクワは何よりもロシアの伝統的生活文化の中心で、「ロシアの魂」と呼ばれ、ロシア人の故地のような存在であった。政治的中心地たることがペテルブルグに移ってからも、古都としてのモスクワへの尊敬は失われず、「第一玉座の」という言葉はモスクワの枕詞・代名詞であった。貴族が回帰するところであると同時に、モスクワは商人の町でもあり、しかつめらしい形式主義を嫌い、実利を尊び、人情に厚く、母性的な抱擁力を感じさせる町となった。都市の形状も計画都市のペテルブルグと異なり、自然発生的に放射状の発展をしたので、不規則な狭い横丁の多い町となっていた。

モスクワは古い家柄の貴族のほとんどが縁を有する地方で、上流貴族はペテルブルグに住んでいても、モスクワにも家を持っていた。また、市内

からはずれた近郊には名門大貴族の名だたるウサージバがいくつも点在し、それ以外に、中小貴族のウサージバが無数に散らばっていた。オレーニン家も中央ロシアのリャザン県カシモフ郡などを中心にいくつかの村を所有していたが、モスクワ圏（現在のモスクワ州南端のセレブリヤンナヤ地区）にアレクセイの父、ニコライ・ヤコヴレヴィチが1770年代に造ったとおもわれるエシポヴォという小さいウサージバを持っていたことが最近判明している⁽⁷⁾。

19世紀前半のペテルブルグとモスクワの貴族の生活を見てみよう。

ペテルブルグの生活

ペテルブルグの最上流層の生活規範は帝室にあり、居住地域も皇帝一家の住まう冬宮を核として、放射状に高級住宅地区（通り）が伸びていた。ネヴァ川に沿った宮殿河岸通り、ネフスキ大通り、ミリオンナヤ通り、マーラヤ・モルスカヤ通り、モイカ川岸通り、ガレルナヤ通り、フォンタンカ川岸通りなどであり、エカテリーナ二世時代からの重臣、貴顕の豪華な邸館が建ち並び、人目を引いていた。オレーニンが最初に持った家は現在のフォンタンカ川岸通り101番の、石造り3階建ての一軒家である。1792年に結婚した妻のエリザヴェータ・マルコヴナ（旧姓ポルトラツカヤ）の持参金で建てたもので、厳密に言えば妻所有の土地と家であった。

フォンタンカ川岸通りは上記の通りの中では冬宮から一番遠く、宮殿河岸通りが終わる夏の庭園の東側（外側）を流れるフォンタンカ川両側につくられた通りである。フォンタンカはネヴァ河に面した「洗濯橋」から始まり、ペテルブルグを半円形に囲むように流れ、ヴァシーリイ島の南のボリシャヤ・ネヴァ川に合流し、フィンランド湾に入る、市内では一番長い

(7) Чижков (2006:183). 同書（改訂第3版）は、ポドモスコヴィエに存在する（していた）ウサージバの網羅的調査としてきわめて価値あるカタログ（地図の付録あり）である。なお、同書の2000年版には、エシポヴォは不出。

川である。当然その両側に沿う川岸通りも長く、家の番号も右岸で 200 をこえている。右岸は夏の庭園から始まって、ミハイル城、アニチコフ宮殿があり、左岸にはシェレメーチェフ伯爵家の豪壮な都市型ウサージバがあったが、この川が町の縁辺となっていることは明白で、フォンタンカ川岸通りはすでに町はずれであった。アニチコフ宮殿（33 番）をすぎてロモノソフ橋にいたるあたりはすっかり下町となり、セミョーノフスキイ橋（川向こうにセミョーノフスキイ連隊の兵舎があった）からはセンナヤ広場が間近で、すでに怪しげな空気が漂っていた。センナヤ広場は 19 世紀のルポルタージュ作家フセヴォロド・クレストフスキイの小説『ペテルブルグの貧民窟』⁽⁸⁾で知られた、下層民が群れる不穏な地域であった。

フォンタンカ川の右岸に非常によく似た 3 階建ての石造りの家が 3 軒（101, 99, 97 番）並んで建っている。エストニアの首都タリン市の有名な「3 姉妹」の建物にならって、ペテルブルグで「3 姉妹」と呼ばれている建物である。この 101 番（当時は 125 番）が最初のオレーニン家で、横に並ぶ家はエリザヴェータ・マルコヴナの妹たちの結婚のために造られた家である。エリザヴェータの母アガフォクレヤ・ポルトラツカヤはこのあたりの広い地所を所有していた。これらの家の背後はもうセンナヤ広場そのものであり、一番東の 97 番の建物の脇には広場への通路があった。

こういうあまりハイブローな地域ではなかったが、オレーニン家の人々とはともかく首都に自邸を構えることができた。上流貴族に属していても家を持たない人々も多く、首都で生活するには賃貸の住居を借りるかホテル住まいをするしかなかった。シェレメーチェフ家のある親戚がペテルブルグに出てきて、はじめネフスキイ大通りのデムート・ホテルに泊まったが、「部屋代と食事代のあまりの高さに目の前が真っ暗になり」、モルスカヤ通りに 6 部屋のアパートを借りた。賃料が月に 300 ルーブリと住居費も高いが、貴族には移動に馬車が必要であり、馬車の維持・確保は住居費以上の

(8) Крестовский В. В., Петербургские трущобы. Т. 1-4, СПб., 1867.

出費をもたらした。馬と四輪馬車を借り、御者を雇い入れて 400 ルーブリかかったという⁽⁹⁾。もちろんペテルブルグはロシアでも飛びぬけて物価が高く、西ヨーロッパからの商品が市場にあふれ、暮らしてゆくのは容易ではなかった。

ペテルブルグに住む貴族たちの中で最上層の特権的貴族層（オレーンン家もこの中に入る）の生活は他の市民と全く異なっていた。高級官僚たちは 11 時から 12 時頃に役所や宮廷に出掛ける。そのころ家では前夜の舞踏会やパーティで疲れた妻や娘がやっと起き出して、洗面、調髪などの身づくろいに取りかかっていた。時間をかけて身なりを整えて、お茶か食事をすますとすでに午後で、2 時頃には他家への訪問や買い物、その後は散策という段取りの外出となる。ネフスキ大通りはそういう散策の馬車であふれていた。冬には橇が使われた。奥様、令嬢たちは服や髪、化粧を最新流行で仕立て上げ、馬車には必ず親戚の者とか知人とかを同伴者としてともなっていた。妍を競い贅美をこれ見よがしにぶらつくのである。

この階層の貴族は地方にいくつもの領地を持ち、領地経営による収入を基盤として市内にも自宅を構えていた。所有農奴数が 50～100 人の中程度の貴族たちは自邸を持つ力はなく、アパートを借りて住み、勤務の給料が生活の大きな支えであり、贅沢とは縁がなく、家族は衣食を切り詰めて、ようよう暮らしていた。さらに下の 10 人以下の農奴所有貴族となると、貴族としての特権はあるものの、生活実態は下層商人や農民と変わるところがなかった。領地や農奴をほとんど持っていない最下層の貴族はゴーゴリの『鼻』のアカーキイ・アカーキエヴィチ・バシュマチキンそのものと言って過言ではなかったのだ。ペテルブルグの貴族社会にはまず官位の序列があり、そのヒエラルヒー社会で生きてゆくためには経済力が必要とされた。

(9) Яковкина (2002:38)。1 ルーブリの貨幣価値に関しては藤沼貴訳によるトルストイ『戦争と平和』（岩波文庫、2006）第一巻に訳者による考察がある。19 世紀中頃の金貨 1 ルーブリは 1 万円ぐらいだったという。

オレーニンのフォンタンカの家は彼の文化的教養と開放的な性格、それに妻エリザヴェータの優しい抱擁力のある人格からすぐに知人、友人ら文化人が集まる、賑やかなサロンとなっていた。集まる人たちの輪は広がり、その中に若きプーシキンもいた。1819年のはじめ、オレーニンの家（当時123番、現在97番の建物）でプーシキンは、エリザヴェータ・マルコヴナの姪にあたるアンナ・ケルンに初めて出会っている。

モスクワの生活

一方、モスクワの貴族社会は17世紀、またそれ以上昔からの門地貴族としての由緒を持つ旧大貴族たち、ヴァーゼムスキイ、オボレンスキイ、シチェルバトフ、ヴォルコンスキイ、ドルゴルーキイといった名家が支配する世界であった。鷹揚で堅苦しいことを嫌い、地主的な専横性が横溢していた。モスクワの大貴族の邸宅には無数の屋敷農奴が住まわされ、それぞれに割当てられた主人の用を待っていた。クスコヴォやアルハンゲリスクなどの遊楽のための大ウサージバを除いては、一般にモスクワの家は豪華であるが、きらびやかさを欠き、素朴で単純さが感じられた。同族が大家族で住んでいることも多く、来客を好み、その歓待ぶり、もてなしの厚さでモスクワは有名であった。

モスクワで贅沢に暮らす貴族たちも夏になると近郊の田舎の領地ウサージバで過ごすのが通例であった。一方、地方に住む格下の地主貴族たちは何よりもモスクワに憧れていた。冬の12月には何をさておきモスクワに出て来た。モスクワに來られない貴族はその地方の県都に出て、冬の数カ月都市生活を送るのだった。

モスクワに來た貴族はザモスクヴォレチエ（モスクワ川右岸、川向こうの地域の意）の住居に落ち着き、田舎の領地からあらゆる食料を荷馬車で運び込み、物価の高いモスクワ生活に備えるのだった。冬の間、彼らは同程度の地方地主たちとの社交に勤しむ。クラスの違う有力者との知遇を得ることは難しかったので、高貴な階層から漏れてくる情報や噂に触れるこ

とを楽しんでいた。たがいにせっせと訪問しあい、祝宴、舞踏会、演劇の催しやトランプ遊びに興じて過ごした。あらゆる気晴らしを考え出しては、消費生活に明けくれたのだ。特にトランプ遊びはモスクワの家庭では必ず見られ、娯楽として必須のものであった。子どもたちの縁組相手を捜すのもモスクワ生活での大きな仕事であった。こうして冬の都会生活を過ごした地方貴族たちは復活祭の前には領地へ帰って行った。

モスクワ県や他の地方都市に勤務しているより貧しい貴族の生活は変化の乏しい、きわめてつましいものであった。30人の農奴を有する家に育ったМ.И.ナジモフは回想記のなかで子ども時代の生活を次のように語っている。アルザマスで小官吏として働く父の僅かな給料で支えられた領地のウサージバには四つの大きくて美しい部屋とバルコニーのある家があり、室内には白樺で作った質素な家具が置かれていた。壁は皇帝や有名な司令官の複製肖像画や、風景画で飾られていた。しかし、家の食料貯蔵庫は領地で作られた野菜の塩漬け、ジャムやバター、穀物などで満たされ、いくら来客があっても足りないということにはなかった。お茶もウオッカも不自由しなかったが、金銭的な自由はきわめて限定され、子供たちの着るものは両親の服から仕立て直したもので、「更紗のドレスや自家製でない羅紗のコートを着るのは祝日や来客の時だけであった」⁽¹⁰⁾。こういう中小地主のウサージバの生活は中央ロシアを中心にロシア全土に見られるものだった。

3. プリユーチノの生活

春になると地方貴族は自分の領地へ帰って行ったが、都市に住む有力貴族たちは夏の声が聞かれる頃になると生活空間を町中から郊外へと移すのだった。寒冷地ロシアでは冬は安全な都市部に集中して暮らし、夏は開放

(10) Яковкина (2002:52).

的な野に向かうことはきわめて自然なことで、ピョートル一世をはじめとして、歴代皇帝、皇族はペテルブルグ近郊に自分の夏の宮殿を建て、今ではそのいくつかは豪華離宮として観光資源となっている。夏に宮廷から皇帝家族がいなくなると、貴族たちもわれ先にと郊外の別邸へ馬車を走らせるのだった。

ペテルブルグでは19世紀初め、フィンランド湾の島嶼部がプレステージの高い流行の別荘地となった。イエラーギン島にパーヴェル帝の未亡人であるマリア・フョードロヴナ皇太后が美しく優雅な宮殿を建ててから、島の別荘熱に火がついたのだ。カーメンヌイ島には皇族のオリデンプルグスキイ家、名門のドルゴルーコフ家と次々に風光明媚な場所に別邸が構えられた。これら市内から近い島嶼部に早々と夏の別邸を構えた貴顕たちは、すでに別の領地にいくつものウサージバやダーチャを所有する人々で、この海辺の別邸は完璧に休息と遊楽のためのものであった。夏季、このようなペテルブルグ郊外の水辺の別荘・ウサージバにおいては冬に市内で行われるのと変わらない社交生活が夏の趣向で繰り広げられた。

ペテルブルグの西約20キロメートルの、フィンランド湾に面して広がるペテルゴフの町では、ピョートル一世の時代より帝室の夏の宮殿があり、皇族のウサージバも点在する格の高い避暑地であった。そこでは気楽な個人生活を楽しむ皇帝一家や大公たちに遭遇することも日常であり、夏には華やかなお祭り気分にあふれるのだった。

アレクセイ・オレーニンが夏の別邸、ウサージバ・プリューチノをつくるために買った土地はペテルブルグから約17キロメートルの北西にある未耕地の荒れ地であった。人気の別荘地では決してないが、当時忙しい官僚としては長く首都を留守にできないこともあり、距離的にも首都との往来可能で、妥当な購入価格（3000紙幣ルーブリ）ということで、身の程にあった小領地と考えてのことだろう。

1795年から建て始められたプリューチノは、必要な建物がまず木造で

建てられ、1799 年ごろには一応の形が出来上がった。その後、領地内に建材であるレンガを自給すべく造ったレンガ工場が稼働し始めると、建物は順次石造りに建てかえられてゆく。ウサージバでは絶えず改築・増築が行われていたが、19 世紀に入る頃にはウサージバとして十分機能するものが整っていたと思われる⁽¹¹⁾。

1802 年にアレクセイ・オレーニンがその年に亡くなった父の遺産を分ける問題でペテルブルグを離れていた時、妻のエリザヴェータは建設中のプリューチノから旅先の夫に手紙をしたためている。

「……ノヴゴロドからのお手紙有難う。プリューチノがこんなに愛しく思えたことは初めてです。ワーリンカ（長女：引用者）はここでみちがえるほど良くなりました。健康に朗かになりましたよ。早く帰って来てください。別々に住んではいけないわ。悲しく思えてしまうから。遺産は欲しいだけあげてしまえばいい。……昨日まですごい雨が降って、草原は水浸しで、池も恐ろしいほど増水しました。堤は無事だけど、傾いてしまったように思えます。家計のためには水車がつくれればいいのですが。例の炉は今日据え付けはじめました。地下蔵は無事です。家の前のクローバーは今日刈り取りました。とても伸びていたので、台所の前の草地はとても青々としてきました。これであなたへのニュースはすべてです」⁽¹²⁾

一家は5月から初雪（10月）までこの屋敷で過ごした。プリューチノは実に一家の半年の生活の場であった。オレーニン一家が市中から移り住む前に、当然プリューチノでは受け入れ準備をしなくてはならなかった。主人用、客用の建物では炉や暖炉が焚かれて、部屋が暖めておかれた。戸外では春の太陽の下でたくさんの羽根布団等の夜具が干され、風を通された。温室から木桶や鉢に植えられた植物が持ちだされて、庭が華やかにな

(11) プリューチノ建設の歴史は、坂内知子（2013）で概略した。

(12) Певрушина（2008：173, 174）。

った。小道には砂や砂利が撒かれて、主人たちの散策にそなえられた。馬丁たちは馬車小屋から馬車を引っ張り出し、修理や塗装を施した後、主人たちを迎えにペテルブルグへ馬車を走らせるのだった⁽¹³⁾。

出立するオレーニン家はどんな人々で構成されていたのだろうか。家族がもっとも多かった1810年前後で見てみると、アレクセイ（父：1763年生）、エリザヴェータ（母：1768）、ニコライ（長男：1793）、ピョートル（二男：1794）、アレクセイ（三男：1798）、ヴァルヴァーラ（一番初めの娘夭折で長女とされる：1802）、アンナ（二女：1807）の7人がオレーニンの家族である。しかし、オレーニン家には家族同然、または、その一員とも見なされう同居人がたくさんいた。まず、幼いころからオレーニン家で養育されてきたアンナ・フョードロヴナ・フルマン（1791生）と、この家に住みついている遠縁の貴族女性が二人、マルファ・フョードロヴナ・コハネエヴァとアンナ・チモフェエヴナ・ドラムチェエヴァがいた。それに子供たちの家庭教師たち男女数人、語学教師のフランス人、イギリス人たち。乳母のイギリス人女性とその息子もいた。また、オレーニン家にはほとんど住みこんでいるアレクセイ・オレーニンの部下たち数名。その様子を伝えるФ.Ф.ヴィーグりはまるで「ノアの箱舟のようだった」と表現する⁽¹⁴⁾。この大家族とその生活を支える大勢の召使たちが何台もの馬車に分乗し、冬の生活に別れを告げるようにペテルブルグを離れていくのだった。

オレーニンたちはセンナヤ広場近くの自宅を後に、おそらく次のような行路でプリューチノへ向かったものと思われる。馬車の列は市内を走って夏の庭園のそばのトロイツキイ橋に到り、まだ浮橋であった橋を渡る。さらにネヴァ河から分かれたボリシャヤ・ネフカ川を渡ってヴィボルグ地区に入る。この地区は市内よりも標高が数メートル高く、ペテルブルグがっ

(13) Певрушина (2008:177).

(14) Вигель (1892:153-154).

くられる前からロシア人の集落が散在し、スウェーデンとの国境地帯と見なされてきた。ここには関所があり、市内から出る者は登録されなければならない。兵士によって遮断機があげられ、馬車の列はネヴァ河沿いに進んでゆく。火薬工場とイリヤ教会のあるイリインスカヤ特区を抜け、リャーボヴォ道に入り、ウサージバに到着する⁽¹⁵⁾。市境の関所から16ヴェルスタ走り、彼らは華やかだが、社会的緊張に満ちた首都の生活から逃れ、プライベートな領地内での夏の生活に入ってゆくのである。詩人バーチュシコフのうたう「善き魂をかくまうところ」プリューチノが彼らを待っていた。

ネヴァ河のむこうに別荘がある、
都から約20ヴェルスタ（露里＝約1km：引用者）のところ、
ヴィボルグの境界のわきの、
峻嶒なパルゴラの近く、
ダーチャとかムィザとかよばれる屋敷がある、
善き魂をかくまうところ（ロシア語で「プリュート」：引用者）、
そこには善良なエリーザと、
彼女の立派な夫君がいて、
心を開き、
優しい言葉を口にして、
簡素な食卓を
柔らかな草の上でかこみ、
舞踏会のドレスは着ずに、
小さいこの隠れ家に
ペトログラードから友人が
村の祭りだと訪れるのを待っている⁽¹⁶⁾

(15) Певрушина (2009: 177).

客たち

高級官吏でありながら、学術、文学、芸術分野に多彩な関心を持つオレーニンの家にはさまざまな客が出入りしたが、それも当代一流の文化人たちが多く訪れた。また後にロシア文化史に名が記されることとなる若き日のインテリ、芸術家たちが寄り集って来た。フォンタンカの家に早くから客となっていた、演劇作家のオーゼロフ、シャホフスコイ、同じくマリン、後に女優のセミョーノヴァら俳優たちもやって来るようになった。少し遅れて、詩人・翻訳家のグネジチ、詩人のバーチュシコフが来るようになった。やがて子供の世代の若人たち、詩人ヴァーゼムスキイ、そしてプーシキンが訪れ、ポーランド人詩人ミツケーヴィチも来て滞在した。アレクセイ・オレーニンが芸術アカデミーの総裁となってからは芸術家がたくさんやって来るようになった。画家のキプレンスキイ、ブリュロフ兄弟、ガムペリン、ヴァルネック、そして彫刻家のフョードル・トルストイ。また、後にデカブリストとなるセルゲイ・ボルコンスキイ（アレクセイ・オレーニンの従弟）、トルベツコイ、バストウージェフ＝リュエミン、ペステリ、ムラヴィヨフ兄弟、ムラヴィヨフ＝アポストルたちもいた。彼らはオレーニン家の三男アレクセイの友人でプリューチノの常連客であった。

古文書収集家のムーシン＝プーシキンや作家カラムジンも訪れ、中国学者 П. И. カーメンスキイ、インド学者の Г. С. レーベジェフといった学術関係の人々もやって来た。ドイツ人博物学者のフンボルトもオレーニンに会うため訪れており、ちょっと名の知れた外国人知識人は必ずペテルブルグからプリューチノに回って来たという⁽¹⁷⁾。

また、一時オレーニンの上司となり、難しい関係にもあった、政治家

(16) Батюшков (1979: 199). Приютино (2008: 341-342). 同アンソロジーの編者アガマリャンによれば、「А. И. ツルゲーネフへの書簡」と題されたこの詩は1813ないし1814年の作とされるが、Батюшков (1979) では1818年とされる。

(17) Приютино (2008: 85), Солнцев (1876: 128, 311-316, 617-623, 633).

A. A. アラクチャーエフもプリューチノの客となったことがある。オレーニンもアラクチャーエフの有名なウサージバであるグルジノを訪問している。帝立図書館長、芸術アカデミー総裁のオレーニンは職務上の部下たちや、アカデミーの教授連中、芸術家の卵である画学生たちをも迎え入れた。

そして、オレーニン家、ポルトラツキイ家、ヴォルコンスキイ家、アルハーロフ家、チェルヌイシヨフ家、ドルゴルーコフ家、ブルドフ家といった、親戚の面々である。

夏の生活

夏にはペテルブルグ市内の家のサロンがそっくりプリューチノに移ってくるのだった。人数の多い家族に加えて絶えず来客があり、オレーニン家のディナーのテーブルはいつも大勢でにぎわっていた。考古学者で画家のФ. Г. ソーンツェフはオレーニン家の客の多さを、ウサージバには乳牛が17頭いたが、クリームがいつも足りなかったということである、と言っている⁽¹⁸⁾。

彫刻家 Ф. П. トルストイの娘で、子供のころ、父に連れられてプリューチノをよく訪れていた М. Ф. カーメンスカヤはその思い出を次のように書き残している。

「家庭の日常生活においては主人としてのアレクセイ・ニコラエヴィチは率直で、喜んで客を迎え、客人をみんな全く自由にさせてくれた。みんな好きなことをしてよく、誰にもそれを邪魔されることはなかった。アガフォクレヤ（エリザヴェータの誤り：引用者）・マルコヴナは女主人として愛想よく、誰にも思いやりを持って接し、客のすべてに美味で十分な食事を供した。しかし、オレーニン家では当時の他家貴族の食卓でのように度をこして食べたり、飲んだりすることはなかった。すべてにおいて節度があり、主人夫妻への敬意があった」⁽¹⁹⁾オレーニンも主人として客にでき

(18) Приютино (2008: 84), Солнцев (1876).

るだけヴォーリャを楽しませようとしていたようだ。

ソーンツェフもプリューチノでの生活を描いて言う。

「オレーニン家では、とくにウサージバでは、のびのびと客になることができた。一人ずつそれぞれの部屋があてがわれ、必要なものが全部与えられて、それから次のように告げられる。9時にお茶があり、12時に朝食、4時に正餐で、6時に軽食、9時に夜のお茶になるということを。全ての客は、それを知らせる鐘を鳴らして、呼ばれる。他の時間は昼も夜もそれぞれ自分のしたいこと、散歩とか、乗馬、森の中での銃やピストルでの狩猟とかすればいいのだ。アレクセイ・ニコラエヴィチが弓の弦の引き方を見せてくれることもあった」⁽²⁰⁾

ヴィーゲリの回想記も見よう。

「これほど自由な楽しみと、同時に上品さに出会えるところは他所にはなく、このように和気にあふれ、それぞれがこれほど思いやりをみせる家庭はないし、これほど教養と厚意にあふれた夫妻はいない。何よりも注目に値するのはヨーロッパ流の生活の快適さと、ロシア古来の素朴さや慣習が上手く組み合わせられていることである」⁽²¹⁾

オレーニン家の食卓は滋味にあふれるものだったが、決して奢侈に走るものではなかったようだ。また、二男ピョートルは14歳の時（1809年）、「13時間、またはプリューチノ」という軽妙な文を書いて⁽²²⁾、プリューチノの夏の日午後の午後を紹介している。台所ではロシア料理がつくられてい

(19) Приютино (2008: 61), Каменская (1991: 134-136).

(20) Приютино (2008: 84), Солнцев (1876).

(21) Вигель (1892: 153-154, 142-146), Приютино (2008: 70).

(22) この文が、1809年にモスクワで出版された П. Г. Гагарин の「30日、またはフィンランド」(著者がアレクサンドル一世に同行してフィンランドを訪れた際の旅行記。原文フランス語)のパロディであるとしたのは、アレクセイ・オレーニンの優れた伝記作者であるファイビソヴィチである(Файбисович, 2006: 402)。彼の仮説を認め、この問題をさらに調査した論考として Агамалян (2011) がある。

たことがわかる。時代が下るにつれ、貴族の台所からはフランス風の料理が出てくるようになる。

「鐘がわたしたちに正餐を知らせます。わたしたちは木々の枝の下に整えられた食事のテーブルに向かいます。……ああ、食事の時間が生活の中で最も大事と言う人々、あなた方のために書きましょう。プリューチノのディナーについてお話ししましょう。私たちはオクローシカ（夏の冷たいスープ：引用者、以下同）から始めます。それは単純な食べ物ですが、栄養ゆたかな、スラブ人の末裔に好まれる食べ物なのです。それにシチ（野菜スープ）とクレビャーカ（ピロシキの類）が続きます。その後、よい牛肉が一切れ出され、焼かれたパンに豆が付けられたもの、仔牛肉が少し出てきます。クリームのでえられたトゥヴォログ（チーズの一種）でシメとなります。主人がワインを求めたので、私たちには古く良きラフィタが供されました」⁽²³⁾

オレーニン家も食物については出来るだけ自給を目指したにちがいない。プリューチノで採れるものや他の領地から運ばせた自家製のものです。ロシア料理を作らせたのだろうが、ワインなど外国製の必需品も少なくはなかったのだ。

野外で食事をすることもよくあったようだ。プリューチノの屋敷建物自体はペテルブルグ郊外の流行の豪華な別荘とはまったく違った、装飾的な要素のない質素なものだったが、ルビヤ川の岸の高みにあり、そこからの眺めは、清涼な流れの小川が幾筋もルビヤ川に流れ込み、二つの堤が池をつくり、起伏のある地形の素晴らしいものだった。

庭園はウサージバの野外の客間であった。先にあげたバーチュシコフの詩は続ける。

……

(23) Приютино (2008:349), Первушина (2008:178).

詩人でなまけものの幸運児よ、
そして繊細な哲学者、
クリイロフはそこで夢想する
白樺の陰のもとで、
寓話の中の動物のことを、
パルナス風にバラを手折るのも
プリューチノの森の中、
グネジチもそこで憧れにひたる
ギリシアの神々のことへの思いに⁽²⁴⁾
……

II. A. クリイロフも、H. II. グネジチもプリューチノにはほぼ棲みついていたことは広く知られていた。

庭園を散策するのはウサージバの大きな楽しみ方であるが、ヴァーゼムスキイはプリューチノの庭園を敵に回した。1828年、II. A. ヴァーゼムスキイは妻への手紙で書いている。

「ミツケーヴィチと夕方オレーニン家のプリューチノ村に行った。17 ヴェルスタぐらいのところだ。そこでわれわれは色男っぽく顔をしかめたプーシキンにも会った。村はなかなかきれいなところだ、特にペテルブルグから行くと。かなりの起伏のある景色で、隆起があり、川があり、森がある。しかし、そのかわり蚊がこの地を真の地獄にしている。ほかのどこにもこんな大群の蚊（蚊はロシア語でカマルと発音：引用者）を見たことがない」。彼はすんでのところでカマリンスカヤ（ロシア民謡、踊りの一種：引用者）を踊り出すところだったという⁽²⁵⁾。

しかし、一緒に庭園を歩いていたプーシキンは真の伊達男だった。ヴァ

(24) Батюшков (1979: 199-200), Приютино (2008: 342).

(25) Литературное наследство. Т. 58, М., 1952. С. 78; Мурашова (2008: 50).



図2 戦死した長男が植えたカシの木の跡に置かれた記念石

ーゼムスキイは続ける。「蚊の大群に包囲されて全身腫れあがったプーシキンが優しげに言ったものだ、「甘美だ」と」⁽²⁶⁾

それでもプリューチノの住人、客人たちはよく散歩をして夏の日をすごした。ウサージバの回りを馬で廻ることもした。池にボートを浮かべて楽しむこともできた。

片側が池への斜面となる散策路のわきに、記念の石碑が置かれている。低い四角い石が台座に置かれているだけの目立たない

記念碑である。グネジチによって書かれた碑文は今ではもう読めなくなっているが、これはオレーニン家の長男ニコライがボロジノの会戦でナポレオンのフランス軍と戦い、戦死したことを追悼するために1813年に置かれたものである。かつてここには子供のころニコライが植えたカシの木が伸びていたのだが、彼が戦死した後で枯れてしまい、そのカシの木の跡に記念の石が据えられたのである。ウサージバには記念の樹木を植える伝統があり、プリューチノでは子供たちがカシの木を植えたのであった。

プリューチノには1814年になって傷を負ったフランス兵が現れた。リヨン生まれのマトヴェイ・ピカールという若者で、当局の許可を得て、オレーニンが引き取ったのである。長女ヴァルヴァーラは、ピカールはオレーニン家に長く住んでいて、彼女の乳母の孫のロシア娘と結婚したと書いている⁽²⁷⁾。

(26) Первушина (2008:178).



図3 妻の「名の日」の古典劇（オレーニンの絵）

そのほかの過ごし方について、上記ソーンツェフの文は続く。

「ペテルブルグの家でもそうであったが、別邸でもオレーニン家ではトランプ遊びはきわめて例外的な場合を除いて、全くと言っていいほどすることはなかった。そのかわり、特にアレクセイ・ニコラエヴィチがいる時は活発な会話が花咲くのだった」⁽²⁸⁾

同じく、カーメンスカヤも言う。

「そうです、彼らのところに集まる人たちは他のところの人たちとは違っていました。彼らのところには貴顕も、俳優たちも来ました、画家や文学者たちも。でもどんな人たちも他より優位にあるということとはなかったのです。みんなを知性や芸術への理解と愛が結びつけていたのです……彼らの家ではいろいろな名手が歌を歌ったり、楽器を演奏したり、文学者は朗読したり、ロシアの文学に起こった新しい出来事のすべてが議論されましたし、画家は絵をかいていました……若い人たちは踊り、家庭劇場を催したり、活人画をつくったり……オレーニン家の祝祭にないものは一つ、鞭の下で主人方のために踊ったり、楽器を演奏したりする農奴のダンサーや音楽家たちでした……手短かに言えば、当時でもアレクセイ・オレーニン

(27) Приютинo (2008:17).

(28) Приютинo (2008:84); Солнцев (1876).

の家では農奴制のつらい場面を目にすることはありませんでした！」⁽²⁹⁾

プリューチノの祝祭行事で最も熱心に行われたのは5月2日の女主人エリザヴェータ・マルコヴナの誕生日と9月5日の彼女の名の日のお祝いであった。特に、名の日のお祝祭は盛大で何人もの同時代人がその様子を書き残している。1806年9月5日には初めて野外に大掛かりな舞台がつくられ、C. H. マリンによって書かれた古典劇を家庭演劇として上演し⁽³⁰⁾、後世の語り草になるほどの祝祭となった。歴史家 B. O. クリュチェフスキイは「首都の文学・芸術家の間では30年ほどもこの9月5日のことははっきりと覚えられていた。当時、みんなオレーニンのペテルブルグの家や別荘のプリューチノへ喜んで足を向けた……文学者、彫刻家、画家の巨星たちは、ここでは敬意のこもったもてなしのあることを知っていた」⁽³¹⁾と書いている。

隣近所付き合い

19世紀前半、祝祭の豪華さでペテルブルグはおろかロシア中に名を轟かせたのは、プリューチノの隣のウサージバ、リャーボヴォであった。もと、プリューチノもその一部であったリャーボヴォは持ち主が幾度も変わったが、1818年に大富豪のフセヴォロド・アンドレエヴィチ・フセヴォロシスキイ（1769-1836）の所有となってウサージバとして遅咲きの花を咲かせてゆく。稀代の幸運児フセヴォロド・フセヴォロシスキイは、1790年にエリザヴェータ・ペトロローヴナ女帝時代の寵臣であったニキータ・ベケートフの庶出の娘と結婚し、多大な持参金を得た。ペンザに出自を持つ貴族のフセヴォロシスキイは伝記によると「昔気質のロシアの旦那」であったというが、ペルミの製鉄業で成功した伯父に気に入られて、伯父の死

(29) Приютино (2008: 63), Каменская (1991, 134-136).

(30) Приютино (2008: 378-390). この古典劇とは、Марин С. Н. «Превращенная Дидона» のこと。

(31) Ключевский (1983: 131). ただし書かれたのは1893年。



図4 リャーボヴォ全景（1820年代のリトグラフ）

後、その莫大な遺産をすべて相続し、領地経営だけでなく、鉱山・製鉄業など受け継ぎ、企業家として才能を発揮してさらに富を築いていった。またウラルの所領地から金鉱が見つかるなど幸運が続く、彼はその財力で1812年のナポレオン戦争では自費で2000人以上の義勇兵を集め、兵装させて送り出した。戦後、住居をペテルブルグに移し、しばらくしてリャーボヴォを手に入れたのである。彼はここに自分の理想の「貴族の巣」をつくらうとしたのである⁽³²⁾。

ウサージバはルムボロフスカヤ山という70-80メートルの高台を中心に構成されていた。高台に二階建ての宮殿のような華麗な主館が建てられ、160もの部屋があったと言われる。幾重にものテラスをつくって下降するまわりの土地にはイギリス風の風景式パークがつくられた。晴れた日には遠くペテルブルグやシリセリブルグが望められた。リャーボヴォの近くには3つの湖があり、その回りの森林も整備されて、その中にウサージバから25ヴェルスタ（約26km）以上もの道が敷かれていた。祝祭には天気がよければ、主人を囲んで馬車での散策が欠かせなかった。そして、散策のあと、レストラン「カラム布林」でのディナーとなるのが通例であった。

(32) Мурашова (2008:13).

ロシア中に知れわたった、1822年10月24日のリャーボヴォの主人の
名の日の祝祭行事について M. II. プィリヤーエフは次のように書いている。

「この大富豪は自分の名の日に数百万ルーブリをかけた……この貴顕の
主館は160の部屋がある二階建てであった。リャーボヴォへペテルブルグ
から10月24日の主人の名の日の祝賀のために500人以上の客がやって来
た。全部の客に特別に部屋が用意されていた……祝宴は三日続いた。リャ
ーボヴォの馬場では騎士装束での馬上試合のトーナメントやカルーセル馬
術競技があり、甲冑をまとった騎士が闘った。この富豪の正餐はロシア全
土に鳴り響くものだった。ウラルから郵送便で取り寄せたチョウザメを湯
気の立つ鍋にまるごと入れて蒸し煮にして、その鍋をたくさんの布巾で捲
いて、雪のように真っ白なルバシカを着た四人の屈強な料理人が運び入れ、
そのまま供するのだった。劇場ではフセヴォロシスキイの農奴の男女俳優
が演技を見せていた。かなり多人数のここの劇団員たちである……」⁽³³⁾

プリューチノとリャーボヴォは境を接し、日常的な用件で不断に付き合
う必要のある隣同士であった。1821年7月、オレーニンはフセヴォロシ
スキイに手紙を出し、たがいの領地の村民同士の諍いのことでやんわりと
クレームをつけている。「……火薬工場の祭から帰るところのオシップと
いう名の拙家の指物師が、したたか酔っていたのではありますが……おた
くの農民の一人に「こんにちは兄弟、おやっさんよ」と声をかけたら、返
礼に一発くらい、今も彼の顔を赤く美しくしております、その場には村長
もいたのですが、彼は止めるどころか、その勇士にもっと手柄をたてろと
か……」フセヴォロシスキイからは直ちに返事がきた。「以前の所有者た
ちによって根付いてしまった悪癖を根絶するためであれば、村長を兵役に
やってもよし、兵役は避け、仕事を課して罰としてもよし、その農民は兵
隊にはむいていませんので、いかようにも貴殿のご判断に従う用意があり
ます」⁽³⁴⁾

(33) Пыляев (1994: 64-65).

オレーニン夫妻もリャーボヴォで催される演劇を見にゆくこともあった。また、リャーボヴォの農奴劇団、楽団は作曲家でヴァイオリン奏者のマウレルが指導するレヴェルの高い集団で、プリューチノへ援助出演に来ることもあった。オレーニン家の客たちも双方に足を向け、どちらの行事にも参加していた。上記のフセヴォロシスキイの名の日の盛大な祝祭は三日続き、四日目の10月27日は屋敷農奴、職人、農民たちのための宴が行われた。隣人であるオレーニンがクルィロフを伴ってリャーボヴォに表敬訪問をしたのはその翌日28日であった⁽³⁵⁾。

参考文献

- Агамалян (2003) Агамалян Л. Г., Русская усадьба в эмиграции. Русская усадьба. Вып. 9 (25).
- Агамалян (2011) Агамалян Л. Г., Книга П. Г. Гагарина «Тринадцать дней, или Финляндия» и пародия на нее П. А. Оленина «Тринадцать часов, или Приютино». XVIII век. Сб. 26. СПб.
- Батюшков (1979) Батюшков К. Н., Сочинения. Архангельск.
- Вежбицкая (2001) Вежбицкая А., Понимание культур через посредство ключевых слов. М.
- Вигель (1892) Вигель Ф. Ф., Записки. М.
- Голубева (1988) Голубева О. Д., Хранители мудрости. М.
- Голубева (1997) А. Н. Оленин. СПб.
- Евреин (1898) Евреин Г. А., Прошлое и настоящее значение русского дворянства. СПб.
- Каменская (1991) Каменская М. Ф., Воспоминания. М.
- Канн (1994) Канн П. Я., Прогулки по Петербургу. СПб.
- Ключевский (1983) Ключевский В. О., Алексей Николаевич Оленин. В кн.: Неопубликованные произведения. М.
- Кружнов (2005) Кружнов Ю. Н., Оленины. Три века Санкт-Петербурга. Т. 2. Левиафанский век. Кн. 4. СПб.

(34) Мурашова (2008: 20).

(35) Мурашова (2008: 20).

- Ливен (2000) Ливен Д., Аристократия в Европе. СПб.
- Лихачев (1984) Лихачев Д. С., Заметки о русском. 2-ое изд., доп. М. (リハチ ヨーフ『文化のエコロジー』長縄光男訳, 1988 年)
- Лихачев (1985) Лихачев Д. С., Письма о добром и прекрасном. М. (リハチ ヨーフ『ロシアからの手紙』桑野隆訳, 1989 年)
- Лотман (1994) Лотман Ю. М., Беседы о русской культуре. Быт и традиции русского дворянства (XVIII-начало XIX века). СПб. (ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン『ロシア貴族』桑野隆他訳, 1997 年)
- Миронов (1999) Миронов Б. Н., Социальная история России периода Империи. В двух томах. Т. 1. СПб.
- Мурашова (2008) Мурашова Н. В. и Мыслина Л. П., Дворянские усадьбы Санкт-Петербургской губернии. Всеволожский район. СПб.
- Муравьева (2008) Муравьева И. А., Салоны пушкинской поры: Очерки литературной и светской жизни Санкт-Петербурга. СПб.
- Оленина (1999) Оленина А. А., Дневник: Воспоминания. СПб.
- Первушина (2008) Первушина Е. В., Усадьбы и дачи петербургской интеллигенции XVIII-начала XX века. Владельцы, обитатели, гости. СПб.
- Познанский (1975) Познанский В. В., Очерк формирования русской национальной культуры. Первая половина XIX в. М.
- Приютино (2008) Приютино: Антология русской усадьбы. Составление и комментарии Л. Г. Агамалян и И. С. Ефимовой. СПб.
- Пыляев (1994) Забытое прошлое окрестностей Петербурга. СПб., 1889.
- Семевский (2013) Семевский В. И., Крестьянский вопрос в России во второй половине XVIII и первой половине XIX века. М., 1905.
- Солнцев (1876) Солнцев Ф. Г., Моя жизнь и художественно-археологические труды. Русская старина, 1876. Т. 15, Янв., фев., март.
- Сотрудник (1995) Сотрудник Российской национальной библиотеки—деятели науки и культуры. Биографический словарь. Т. 1. СПб.
- Тимофеев (1983) Тимофеев Л. В., В кругу друзей и муз. Дом Оленина. Л.
- Тимофеев (2004) Тимофеев Л. В., От Парфения (Родословная Олениных). Памятники культуры. Новые открытия. Ежегодник. М.
- Тимофеев (2007) Тимофеев Л. В., Приют, любовью муз согретый. СПб.
- Файбисович (2006) Файбисович В. М., Алексей Николаевич Оленин. Опыт

- научной биографии. СПб.
- Чижков (2006) Чижков А. Б., Подмосковные усадьбы. Аннотированный каталог с картой расположения усадьбы. 3-изд., переработанное и дополненное. М.
- Шмелев (2011) Шмелев А. А., Приютино Олениных. К вопросу семантики подземных сооружений. Русская усадьба. Вып. 16 (32). СПб.
- Шмелев (2002) Шмелев А. Д., Русская языковая модель мцра. М
- Яковкина (2002) Яковкина Н. И., Русское дворянство первой половины XIX века. Быт и традиции. СПб.
- Lovell (2003) Lovell, S., Summerfork: a history of the dacha, 1710–2000. Cornell UP. (Ловелл, С., Дачники. История летнего жилья в России 1710–2000. СПб.)
- 坂内知子 (2012) 「ロシア貴族とウサーヂバ：A・オレーニンと別邸プリューチノ (1)」『人文・自然研究 第6号』(一橋大学 大学教育研究開発センター)
- 坂内知子 (2013) 「ロシア貴族とウサーヂバ：A・オレーニンと別邸プリューチノ (2)」『人文・自然研究 第7号』(一橋大学 大学教育研究開発センター)